

## 『市史』刊行を心待ちして

——よそ者からの扣問こうもん——

新住民・よそ者考

団地入居の抽選の繰り上げとかで、公社から職場へ直接電話があり、「入居するか否か」を即決して欲しいと求められたときに、窓枠を板張りで目隠しした薄暗い陰気な電車が思い出されて、気が重かったが、奥多摩の山々、溪谷への思いがあつて、即答したことを覚えていきます。こうして、福生の町に移り住んで、三十年近い歳月がたちました。

当時の町の様子は、本誌にも先輩の方々がいろいろ紹介してありますので省きます。

暗い夜に、多摩川の岸辺から眺める対岸の風景——灯一つ見えない山々が、神秘的に威圧して迫ってきたことなどは、強く印象に残っています。

移住して、最初のショックは、私たちが新住民・よそ

者として遇されていることを知ったことです。全く経験のないことでした。京都で四、五年生活したことがあったのですが、ここでは、マロウト的歓待の壁というものでした。

今では、福生の生活環境・住み良さ度は、都下でも一、二の水準になりました。移住当時は不便も多く、私たちも何かにつけて行政へ注文をつけています。この際に、新住民とは、公的な場での話し言葉。余所者とは、議場廊下で、会話に終止符を打つときの常套語でした。

確かに私も小さな団地でも、市にとっては一割弱、南地区にとつては、人口で四倍、世帯では八倍にもなる侵入者でした。この急激な変化で、地域で保ち育てていた伝統的景観、習俗や地域の特徴、生活と心の中にまでゆさぶりをかけることになったのでした。特に、子どもたちからの影響は大きかったと思います。

須田 三郎

その後、団地増設という経済開発的人口増で、新旧住民の構造的変貌は著しいものがあります。これらに対する住民の対応など、資料集からの分析、『市史』本文での解説が待たれるところです。こうしたことが、生産関係、社会構成史を基軸にした把握だけでなく、「まず郷土を知る」「福生市の将来の展望も全部わかる」(本誌一号)ための『市史』が完成する日が待たれます。

よそ者からの扣問

最初に入手したのは、『ふっさっ子』二集と『羽村町史』です。昭和五十年代に入ると、昭島、秋川などの市史も発行されました。羽村町では、上水資料集も譲ってもらいました。こんなわけで、市史の認識は傍目八目です。『市史』編さんが、通史記述に進んでいるとのことですので、周辺の市町村史を管見しただけの趣味人ですが、福生の近現代の範囲で、いくつかの事項について教えを乞いたいと思います。

——明治初期の支配変革 多くの歴史書の叙述では、「年貢割状の交付など、明治新政府の地方政治が幕政とそっくり」とありますが、天領、私領の多元支配のまま合村移行して、その前後の時期で一般民衆の対応は同列に進行したのでしょうか。村内での民衆相互の受容はどう深化していったのでしょうか。

葦山県、品川県時代の大小区制では、府事、県事の裁量に任せられた政策があったのですか。「熊川村を親村とする十二番組に入る」とありますが、親村と付村の違いは。二十二年以降も、合村、連合、組合村等々の組織機能、担い手、その成立過程なども知りたいところです。

——福生信用組合の成立 本誌二号で、桜沢一昭氏が人物史的位置づけの視点で提言されています。外野から加えさせていただけば、当時、生糸の生産、仲間、輸出を始めとする中小金融による養蚕の青田買いが横行し始めていた頃と思います。従って、組合員の構成、利用等を分析し、「発想」の原点も明らかにしてほしいところです。

この他、短期の多摩村の成立と分離、幻の牛浜村なども知りたいことの一つです。

——都市計画は 現代史になると、よそ者は発言しにくくなるのです。「歴史に学ぶ」「歴史は未来を語るため」とか言いますのでお許し下さい。

熊川地区開発のおくれも不思議の一つです。熊川駅は今も無人駅です。理由は複雑でしょうが、大正期までは、福生地区と並び発展してきたようです。特に製糸は、熊川地区が盛んだったと聞きました。駅周辺の開発や郵便局もそうです。「当時としては理由があった……」ではなく、その理由が知りたいのです。

福生駅西口広場、栄通り巾着等も、この周辺の計画に

しては立派すぎるのですが、これらの立案決定の際のシミュレーションも掲載し、歴史的見通しとか、グローバルとは、の実践的な学習資料の提起が欲しいと思います。

——横田基地はなぜできた 本誌二号での子どもたちの知りたいことの一つです。これは、よそ者にとっての素朴な質問でもあります。『町誌』では、土地所有者の会議、決議だけで、地主や民衆の対応は記録されていません。『市史』では、その後の影響などと併せて知りた

いと思います。

河童の棲む沼——子どもたちにも応えて  
常楽寺池は、底なしで、河童が棲み、大きな白蛇を自分のお使いにしているのです、決して近づいてはだめだ。

これは、私のふるさとのことです。堤防決壊の跡が、こもりした雑木で囲まれている摺り鉢形の湧水池でした。水温が低く、深さは二十米程あり危険なところ。親たちの子ども達への口癖で、伝承になりかけていました。

生物学という「刷込み」は、人間には何歳頃まで学習効果があるのか知りません。「ふるさと」と摺り込む年齢目安は何歳まででしょうか。市史は、市民・市域・市政とから構成されるのですが、市域を「ふるさと」と受容する子どもたちの要望も満たす内容であってほし

いと思います。

玉川上水は、多くの子どもたちの関心ごとです。材料さえ提供されれば、親と子、友だち同志で消化していくでしょう。ですから、社会経済史的内容をふまえて、江戸の用水を守るために、流した地域民衆の血と汗、決死の堀さらい、自分の田畑を見捨てての賦役、長い歴史の中で地域民衆が受けた損益、執着を平易に執りあげていただければ、ビジュアル化の力は、子どもたちの方が持ち合わせているでしょう。

地域住民の構造の変化は、住民意識の定着化より急激に進んでいます。ふるさとと地域のちがいが、「地誌」「市史」「郷土史」「地域史」「地方史」の各々の思想を問いかけたくて、「よそ者」の用語を用いました。お許しく

(すだ・さぶろう 熊川在住)